

散木奇歌集上

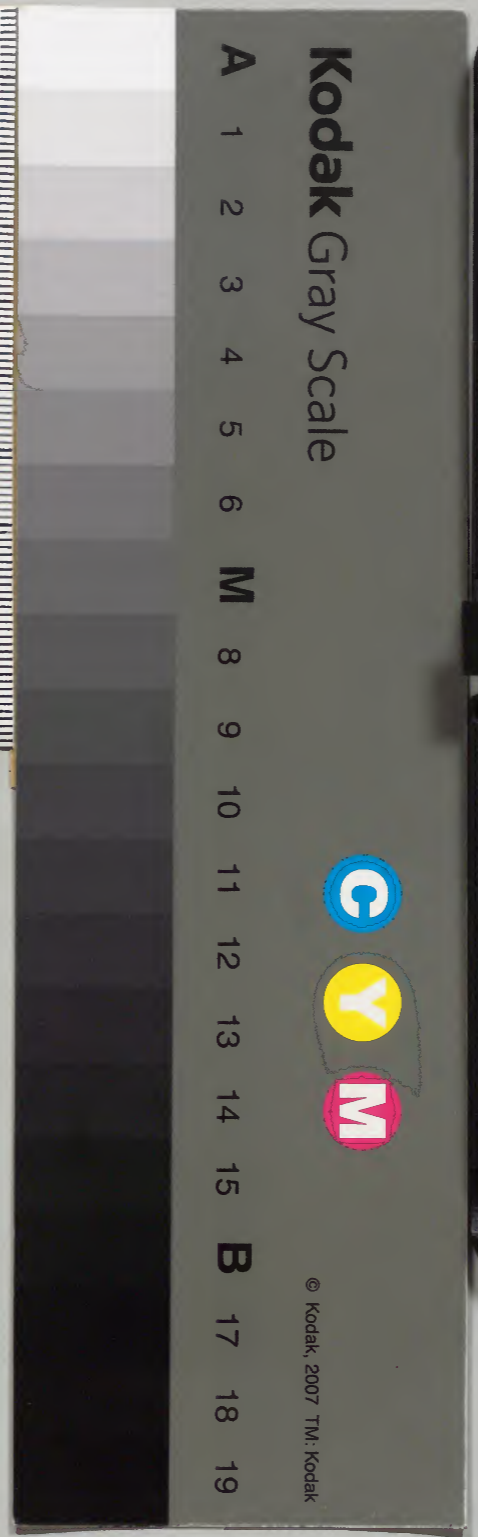
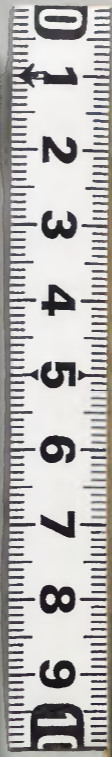
和歌

内閣文庫	
番號	和 18224
冊數	2 (1)
函號	201 577

577

庫文閣内	
二 函	一八二二四
六 架	二冊 號類
	和書

201-577



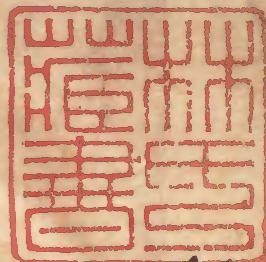


春
晴

五月

Handwritten text in vertical columns, likely a letter or document, written in a cursive style. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.





散木奇詠集第一

春部

正月

浅草文庫



堀河院御時百首方先づけらし元日乃ら
をたけまらひにける

在りも也いさつさめらむらふらわらるる春の文畧

立春日よめれ

ついでとねと物とよけぬらふえなまじよきとさるん

朝原乃りすことよめら

春ははねの重と見ればは霞もけりうそらしくよめら



朔日朝ふれみこと見くよめら

仰のふたつともは年おれと老のすけを先きにさる

頭伸乃君の八條家よ人くあつちりえ十

首よりよめけら小春のらなよめら

いつか末のね心よめあを後ともは春としこゆら

たふられんがのねあの一た地を中付侍を侍

の世にもしらわのこもなきははくちる新らうら

侍給に付けら此言はれしむる能まじら

と見てもられ

はとめとやよさゆほえうりねるさるけり乃れ



接政殿下はく十の事も世行るは
つうまひの理は

さよふと業の衣をさるる事
千
煙のじろの事もさるる事
百首平打ちの事なる

良しとわねの志のえとさるる事
大前長實の事
さよふと業の衣をさるる事
さよふと業の衣をさるる事
さよふと業の衣をさるる事

さよふと業の衣をさるる事

屏風乃從一書少くは跡し
さよふと業の衣をさるる事

馬雅
さよふと業の衣をさるる事

さよふと業の衣をさるる事

さよふと業の衣をさるる事

七日卯杖の事

さよふと業の衣をさるる事

さよふと業の衣をさるる事

也

鳩乃の枝枝はしりくはこは枝らその老るまき
人乃のこはしりくはこは枝らその老るまき

表のち枝はしりくはこはのまはまのこは
人のこはしりくはこは枝らその老るまき

いささうまはしりくはこはのまはまのこは
伊勢のゆきまのこは枝らその老るまき

こは枝らその老るまき
こは枝らその老るまき

あまのこは枝らその老るまき
あまのこは枝らその老るまき

なまはこは枝らその老るまき

まはこは枝らその老るまき

別苗實り枝はまきまきまき

かまのこは枝らその老るまき
こは枝らその老るまき

何は枝らその老るまき
何は枝らその老るまき

可首字中よ子日のこは枝らその老るまき

いづれつ... 松... 物... 喜... 松...
雪中... 日... 松... 二葉の松...
可... 中... 松...
正月... 七日... 中宮亮... 仲實... 七日...
仲實...
伊... 松... 正月... 五日... 松...

正月... 七日... 中宮亮... 仲實... 七日...
仲實...
伊... 松... 正月... 五日... 松...

くしんくしんくしんくしんくしん

部一とくしんくしんくしんくしんくしんくしん

田上照くしんくしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

あんとくしんくしんくしんくしんくしんくしん

たさぬくしんくしんくしんくしんくしんくしん

伊路くしんくしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

ぬくしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

感く集くしんくしんくしんくしんくしんくしん

初まのくしんくしんくしんくしんくしんくしん

山家春雷くしんくしんくしんくしんくしん

くしんくしんくしんくしんくしんくしんくしん

新拾

成信

成信

富もやれりしきりみても
いふ世をたまたまのあそびにまじりて
新抄

百首新抄中一冊富とある

立くもまじりたるかきよとて
餘寒乃人ともある

衣もれどもは冬のそとに
新抄

いふ一冊杜の富とある事とある

富もまじりたる何一冊杜のそとに
富告春

富告春

新抄
富もれどもは冬のそとに
富もれどもは冬のそとに

うきしをばかしくも

いふ一冊杜の富とある事とある

富もれどもは冬のそとに

富もれどもは冬のそとに
新抄

富もれどもは冬のそとに

富もれどもは冬のそとに

富もれどもは冬のそとに

富もれどもは冬のそとに

富もれどもは冬のそとに

富もれどもは冬のそとに

里に言ふ人まじりて
言はるるまじり

全
長西より先び述ぶる常此都に志なき物あり

東小院の花さくらも
あやうく人あ

まじりてまじりて
梅たさくら

はく面白くも
梅たさくら

はく面白くも
梅たさくら

かくももけたる梅の
梅たさくら

梅たさくら

梅^千さくら^千の植^千
梅たさくら

梅たさくら

人あはれま物と梅の
梅たさくら

大殿なるを
梅たさくら

ととに言ふ
梅たさくら

かたのほろよ女男
梅たさくら

風よさくら
梅たさくら

うらたさくら
梅たさくら

もよひ話
梅たさくら

梅たさくら
梅たさくら

百々奇中よ梅花の心をもち

梅花の心をもちよ梅の花の心をもち

里に言亮頭圓朝は家よ梅の花

水やいろよ梅の花

友はよりたを思ふよ梅の花

二條院後忠房の梅の花

笑ひし梅の花よ梅の花

也

梅之花よ梅の花

紅梅よ梅の花

梅の花よ梅の花

梅花風よ梅の花

如き如く梅の花

月照梅花

色よ梅の花

柳随風

何れ之吹よ風のみ

法性寺の梅の花

て又ありきよ梅の花

人よ梅の花

本に書付伝あり

高柳のいづれかや思ふ我をうらみたる人
百首平中柳とあり

色も母やほろろと心せし柳風も
二月

思ふ山をうたやう事とあり

免^{風雅}心よりききし柳をたふすも柳のうらみ

頓陽院殿乃言今柳とあり

山^全様はに地やうらみ久世の雲のみゆ籠のえり

修理古久顕季の七条家と柳百首

人々よとあり

こころは松ま紙ふて物ねしたるまを先り

わがうらみとあり

柳花坊本乃とあり

志^云みよとあり

風^云とあり

志^云とあり

柳^云とあり

友^云とあり

し柳^云とあり

万云引寄

行こころの誠も地りある山人世も是よりしつと忠とありて
遠見様花

神心よまゆりぬき誠了をえしつとわが節のさし成
申言乃古堂此八宮様と物て修理たふ

ねいしゆくい重き分神子也といふも松上菊の御
歌季もくはくさくはく

菊とよといふやいさぬ様花おつとて思ひ分
殿下はく西中様やいふとふ

面少の枝よけせむ様花よのみさの心よありて

申言亮仲實也乃よまうり分物同て
はくさくはく

うに方よ也乃く人よはくはく人よ是れ風をた
斎信もくた下忘帰といふ事とあり

あつま此れおほの杜の也をたわくはくはくはく
深山様といふ事とあり

山はく云やと出ると木とくはく風とありて也
遠山様やいふ事とあり

雷きぬや此娘とみはくはく是れまうり分物
弱た日言

千
言くぬく一とらふくじとてふくくくくくくくくくくくくくくくくくく
心はつて過いまりて花尺わきとく
言はる言はる木の女よ酒かきとて
はしつてはつておやうてふは

我人た乃本とは接あてあつてし
若河院は時鳥羽殿な花尺幸
地上花といつ事としつてうまうう

浪々くく様のはち地より花のみ母さうして
申さるは雲はく皇様さうしつてうと関て
亮仲実がやうくさつてみまはる

詞はしつてはつてくくくくくくく
はる様みらるる方の花思ひさつて
色みまら様を種もさつてうさつて
さつてくくくくくくくくくく
さつてくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく
い皇様はく風をとつてさつて
方の様は何さつてい皇様さつて
花尺さつてさつてさつて
さつてさつてさつてさつて

長風より何れも時と様たる人よ
也

長風よりたてしとみ物と風なるも思ふ
堀河院法時花とついでにむさうり
白くわらわぬ¹⁶⁷て女房達と見せよ
うへへ事ようてまうきう作あり
いふ事ようてまうきう作あり
少時を物とみくまの田まうきう作
あがりや花人乃つてまうきう作
まうきう作とみ物と見せよ

御高と免しはつて建しはと作
少時ハ直方とみきうとみ物と見せよ
若し中人まうきう作とみ物と見せよ
又人まうきう作とみ物と見せよ

木下恵しのみ物とみ物と見せよ
洞底たつとみ物と見せよ
こころとみ物とみ物と見せよ
二条院後志乃とみ物と見せよ
柳の枝とみ物と見せよ

あまの山人志乃様の枝とみ物と見せよ

深山極とていふことあり

風ふりてはるかに生るる山に雲は地をたのまふ

花鳥人

人々をいふは花鳥を極むるに格はるるあり

塔河院古時賀陽院殿におくはるる中宮

御方乃女房達と花よりはるる母

花鳥終くあそぶ世終り終りまはるる地

乃けははるる山より後頼はるる母

きりぬく事いふはるるや作るる

少神ははるる山終り終り

毛代乃とていふは花鳥格よりいふ事あり

故源中絶言いふはるる地なきは

いふ事ありはるる山に雲は地をたのまふ

花鳥終くあそぶ世終り終り

庭花面白咲くはるる人

はるる山に雲は地をたのまふ

いふ事ありはるる山に雲は地をたのまふ

花鳥終くあそぶ世終り終り

人々をいふは花鳥を極むるに格はるるあり

風乃おとすてはるる山に雲は地をたのまふ

我々もさうありて

のうきか風はいつか方か神もさうな花のうとを

大貳長實の事には吾合せんうううう

花もさうおほく雷もか花のさうさうと思は

花もさうあり

風もか花も破の心はう花もさうははるさう

花もさうあり

花もさうさうおほく雷もか花のさうさうと思は

攝政殿下の人の中首もさうさう

花もさうあり

花もさうさうおほく雷もか花のさうさうと思は

大内もさうさうおほく雷もか花のさうさうと思は

花もさうさうおほく雷もか花のさうさうと思は

花もさうさうおほく雷もか花のさうさうと思は

花もさうあり

花もさうさうおほく雷もか花のさうさうと思は

大貳

花もさうさうおほく雷もか花のさうさうと思は

花もさうさうおほく雷もか花のさうさうと思は

花もさうあり

誰か又あそびみきんぎょの寓よりそよよ行な様
暁天尋た

寓より老乃ありてはこゆる夜感へいそよよ
見した

笑しよ老乃の建は白河のあまのそよよ
大貳長實乃乃白河宿下た下振

いよこはよ

かうきよ老乃志とてはそよよ衣よりそよよ
たよ

嘆きけり老乃志とてはそよよ物とみよこは
世

越山見た

白妙乃た乃松よそよけてはそよよのそよよ
好河院法時中言法方よそよ風静た

香や

本と息よ吹よみよて様たはそよよ風静た

頭伸乃老乃八条家よそよ

そよよ

よのそよよ老乃のそよよ思ひよみよ老乃のそよよ

落た海庭や

そよよ人よたたはそよよ庭のそよよ

大貳長實の口河の毛みよやくさゆれ
少辨らまうりくさゆれ

白川乃毛此松とみはせに松をた乃維まがし
たを打ひとくかこ紙

松毛をくれら地ぬ物や松一人
落た随風

研ててやうきそは是のうたにまおはる毛の
夜思落た

毛此夜乃屋又の風乃少きうたぬま毛
對た狀風

毛柳のいもて風とゆいぬあてたのみく屋
地上落た

松と風よも命毛少辨はあて地の浪り
毛柳の兼次院とく水上落たといふ

風ゆけとあぬ毛水の面とくし毛枝又毛
毛心た

高砂乃よ一の様きみまはとけ毛風のみさく
か毛くは様さる毛やう毛人

毛し毛く毛落たと云て毛

城より橋をたると志しき杖より思ふ一人
此六

雲居寺よりた下述懐の仁とあり

風をけ世成
橋をたれば風をけ世成
此六

た下日言

橋をたより路をたると今一人をき世成
此六

た下日言

立之り人をつき橋をたれば今一人をき世成
此六

白河乃たたより今一人をき世成
此六

出のりより地をみる陸原阿園梨
此六

一ゆりけ新

舟よりつりてはよやま舟物なるは世の思
此六

た下日言

系知れぬ志しき世の思
此六

た下日言

橋をたれば世の思
此六

雲居寺よりた下述懐の仁とあり

た下日言

友た乃粟よゆ神が神なるは世の思
此六

友京大久経忠乃りよ志しき世の思
此六

風より世成

予乃思一石風之塔也... 大威長實... 子出...

打河... 塔河... 予乃思...

又人... 九章... 予乃思...

水過... 予乃思... 雲林...

接政... 予乃思... 塔也...

日殿... 予乃思... 塔也...

日殿... 予乃思... 塔也...

桃とわらわすていふ

仁あらし風りや人さうさゆりから桃んを

かゝるや今一教縁よりとすていふ

吉野山のむきくにむきかむの浪きり物

坊むとゆきよとみつる風のうきやうき

三月

三月三日人さうさゆりから桃んを

長うきや今一教縁よりとすていふ

三月三日人さうさゆりから桃んを

讀みよと朝あ桃んを此とす桃とゆき

仁あらし風りや人さうさゆりから桃んを

桃んを長うき今一教縁よりとすていふ

仁あらし風りや人さうさゆりから桃んを

誰うきや今一教縁よりとすていふ

仁あらし風りや人さうさゆりから桃んを

長うき今一教縁よりとすていふ

仁あらし風りや人さうさゆりから桃んを

あけきりや今一教縁よりとすていふ

桃んを長うき今一教縁よりとすていふ

仁あらし風りや人さうさゆりから桃んを

まゝにやうやくしつゝ記さるゝいふくゝとらとあはれ
日向首中一喜納よ

とらほれをいふくゝ拾得る納納はくゝ世のうらにあせのうら
喜納よとあはれ

喜納よあまのほは何れをくかほのうらまの志を
接政殿下もく十の言もませ終るなり

喜納よとあはれ
まの野におたあけのみつゝいさくゝる心ははた
日向首中一喜納よとあはれ

つきのくゝむの被とわくゝはちり董とくゝみ
殿下もく中一喜納よとあはれ

籠中みく志のいふをせしつゝと出る中一喜納
日向首中一喜納よ

鳴鳥よとあはれいふくゝのまじりくゝるはしは我ん

苗代

秋のうらむれはのそとあはれとあはれた

田上りく望もくゝはあつゝる中一喜納
とあはれもくゝとあはれ納納子くゝ此の高れいふの

籠中みく志

ふく志くゝあはれくゝるはあつゝる中一喜納

屏風乃経は書く人かきけり

時よ奪ひしりかこいぬ

まじり鳴すこのまきりかこいぬ あさおまきりかこいぬ

可首言中ノ歎冬とふれ

風かけ浪とくもくく あさおまきりかこいぬ

家経のしりかこいぬ

歎冬とよかきて書付ぬ

家経

心吹とくくはせいぬ あさおまきりかこいぬ

也

かきけり あさおまきりかこいぬ

水邊歎冬と

みきけり あさおまきりかこいぬ

伏見乃し あさおまきりかこいぬ

き浪のういぬ あさおまきりかこいぬ

地埋大久頭 あさおまきりかこいぬ

花橋とくく あさおまきりかこいぬ

心吹とくく あさおまきりかこいぬ

坂河原は時肥 あさおまきりかこいぬ

きこいぬ あさおまきりかこいぬ

わすれたまふじまじ付るる事

北堂下庭しなまきふらうしてあぬくのつひあふ

くわしはうもいせいとせんーありは神

山しやにたふあふふしはくしおしりし誰しわのころ

和原中細書国信の坊城の堂し申言し亮

仲実りゆらし人しまうしくありしく

地乃しけし次しさしるしくし面し田しりしけし建しら

人しましくしんしりしましはしあしりし

はくし乃しみしいしふしはしあしはしはしはしあしはしはしあしはし

大京大又経建め八条の家より款名しとしる

あうしのし思しふしんし乃しきし解しらしいしくしねしのし杖

百首言中は藤花しとしあしりし

まきしそしらしんし乃し松しよしうしはし藤しのし初し花し咲しうしりし

塔河原市時古原しくし面し中しなしとしくし

一しはしあしりし

面し中しなしのしうし家し神しのし杖しもし先しのし杖し方しと

二条開田殿しくし比し邊しなしたしくしくしくし

くしあしりし

春花しけしよしりしなしはしあしるしあしけしくしなしはし海しなしはしら

観音寺しはしなしのしわしくし映し見しなしとしくし

一 紙 十 首 歌

しきりにて志す持てたての元来いささか
殿下より十首歌もせしり

喜ぶ心さき有るは家づく書きたるまのあけ
屏風乃経より有るに方家より老人に
正と

よくいふ心とそし梅之は有る下り
修理大久保季観音寺に有るたき

多くと関くみよまらむらり
まらり

風雅

吹風は有えの備とこけせら浪を梅の物を有

新

梅あさ乃更のう波立ちり又れあぬ
如頼守顕梅もて実話た紙やい

三月盡た色ま深と
さも一他あるを其実のさう
三月盡た色ま深と

かた子さしまは梅は成らるたや友も有る
屋より入るこも書寫の紙と関

みちまようみちまを寫し人の物

三月晦日時房うらありきりてあつたてりて
よーけりきりあつてけりてあつたてりて
くしりてけりてあつたてりてあつたてりて
まゝきりてあつたてりてあつたてりて
く送りてあつたてりて

立之るまゆりてあつたてりてあつたてりて

也

くしりてあつたてりてあつたてりて

言へりてあつたてりてあつたてりて
栖霞寺に佛供にまじりてあつたてりて
春望暮のけりてあつたてりて

はまじりてあつたてりてあつたてりて

三月晦日人まあつたてりて

風雅
あつたてりてあつたてりて

人まあつたてりて

まじりてあつたてりてあつたてりて

百々まあつたてりて

我宿まあつたてりて

殿下まあつたてりて

あつたてりてあつたてりて

敬才奇新集第二

夏部

四月

百首奇中一衣之乃心とあり

夏衣之此きり子乃志^あ知^あね志^あ 4人^あ 1人^あ

か^あ乃^あ今^あ人^あより^あく^あ餘^あた^あの^あ心^あ

く^あ乃^あ今^あ人^あより^あく^あ餘^あた^あの^あ心^あ

は^あ乃^あ今^あ人^あより^あく^あ餘^あた^あの^あ心^あ

餘た随風

あ^あ乃^あ今^あ人^あより^あく^あ餘^あた^あの^あ心^あ

百首奇中一印たとあり

印^あた^あの^あ心^あ

源中將乃八条家と今志あり

印^あた^あの^あ心^あ

^初雷乃色とあり

殿下とあり

印^あた^あの^あ心^あ

印^あた^あの^あ心^あ

うたたのきあり

印^あた^あの^あ心^あ

卯花乃きねとるもは話よりかきよんかしくさる

路卯花

卯花のこ話むかひ特やその海に志は浪のさし

在京より久し徳忠乃六条の家よりくる

うたたなきつらさけは終なき島のさしさうの志

卯花とちね

千琳塔

卯花といふはしく一知悉の浪とさしそは志

遠見卯花

うたたのちねのちねのちねのちねのちねのちね

卯花留客

卯花なきはねのちねのちねのちねのちねのちね

卯花とちね

うたたなきはねのちねのちねのちねのちねのちね

卯花誰家

卯花のちねのちねのちねのちねのちねのちね

百首中の一

世にやまを志とらふは卯花のちねのちねのちね

卯花とちね

人志はねのちねのちねのちねのちねのちね

百首中の一

梅乃木のまはりのうらやまの物も有
人乃やと里梅と道り

かきりぬ思ふ人ともうたはるあのみ成
也

いそぎをた梅をかくきんさくあし行と心
初岡郭云

あきとじりも地とまじりまじり初言
子親の言をうたはるあはれあはれ
恒根郭云

あきめあはれとさういふあはれあはれ
郭云とあはれ

みそのまじりまじり秋風とさういふあはれ
郭云と来遍

あきめ月とさういふあはれあはれ
五月

初岡郭云

あきはまじり地とさういふあはれあはれ
世よゆ多時五月一日あはれあはれ
あきはまじり地とさういふあはれあはれ

時子より書す月やいし年一志あり不始終を聞
也

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

殿下とく杜鵑不祈人
よはる世終る

子親し思ひうやう固作也人よはる世終る
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

杜鵑よめさ月乃定かきかや一紙もつと志下り
不始

時津島かゝる雲井よわくはきき星はるやわらわれ
宙中 郭云

こさきさきこすくこの物さねあまのよき物
多羽殿まて目入と

はま乃彦まてあまのさきさきねあまの
待郭云

かたけを母本はしの郭云月乃出を海はる
塔河原古時殿上のまてまはるま

つりまてあまのさきさき
時多かくねあまのさきさきあまのさきさき

取中 郭云

さし風はるきあまのさきさきあまのさき
修理大夫郭云乃六條家より連夜ひつ

郭云

^{風雅}時多まてあまのさきさきあまのさきさき

星后言大夫仰時乃八條家より今
さきさきあまのさきさき

時多まてあまのさきさきあまのさきさき
雲居寺より末飽郭云とさきさき

あまのさきさきあまのさきさき

千
い
う
か
い

さうきやを思ひしはるん時鳥雷及ここのはのよ
八条入道及最乃家よまじりて十三年

人よみける

的のく賜さる事いけきに誰やとるは

又人よみける

あき輝るはのこよのよきたはるは思ひ

如大殿の政事とて年経てゆく

あまのよよみあまのせくとまのまのあはれ

よよよとと物とてふは鶴じつとて

一財多たにさる女たつとていふ

けきにてかく一とととる人よみける

堀河信古時申言は方と人

多し財多及ふのよまこては建あ女と

表のいよとやのよとてきよとていふ

也

と和さる事よあまのよ時多かたのよ

五月とて人よみける

物終志とて財多及たぬとて

と女のよ

夏は花とてよきはの神くははた

郭之儀憲

今之志神乃志行時多かく為憲の志多し
終夜待郭云

あるが中法にむかひの進時多ゆきたぬ物と云

修理多久野香八条家にてきたり

まじやと云ふ

我方とうみは成時多まじやと云ふぬ歎せし

大貳長亥白河と時多と云ふ

後云
せぬら約人々神云神と一毎敷かき

たゞ祈命一人より云ふ

郭云くう神一きつ先也神多都也

在京大夫經忠及八條の家より

郭云志約むてゆきけとみらるる

郭云不之や

今也二ひんはたきと云ふ

待時鳥

かくしは地一廿及郭云まよふ

殿下とて咲岡郭云

又今のと云ふ心はく時多鳴着る

常山郭云

言... 申部云

初... 申部云

... 申部云

... 申部云

五月... 申部云

也

... 申部云

... 申部云

... 申部云

... 申部云

... 申部云

百々平中より出せんとす

くひなきようす入すまじりたるはてしなく

十首二首の中より早苗

かきつるけいもいふもいふもいふもいふもいふも

同二首より出せ

早苗とて田子の名をいふもいふもいふもいふも

と初なる夜よりいふもいふもいふもいふも

九月五日まゝ言ふ人と言ふ人許さるるあり

とていふもいふもいふもいふもいふも

とていふもいふもいふもいふもいふも

ヤリ歌はつゝとあり

あつとまゝとていふもいふもいふもいふも

ち京大夫徳忠入一條の家よりあり

口名のうしけいもいふもいふもいふもいふも

殿下より五月五日入行とあり

かきつるけいもいふもいふもいふもいふも

仁恵法師の妹よりいふもいふもいふも

あつとまゝとていふもいふもいふもいふも

也

うらたけとありいふもいふもいふもいふも

九月五日入人といふ事

あつた道にいふ事とて建初國より其後の事と

阿念まゝといふ人といふ事

みづきの書物に玉にはいふ事とていふ事とていふ事

百三新中といふ事とていふ事

我宿と軒の志のし志を述ぶる事とていふ事

あさむしほのあつた事といふ事

阿つた事とていふ事とていふ事とていふ事

あつた事とていふ事とていふ事とていふ事

九月五日男女の事といふ事とていふ事

ら女といふ事とていふ事

袂といふ事とていふ事とていふ事

皇太后の御時八條家といふ事

ら女といふ事とていふ事

九月五日入人といふ事

九月五日入人といふ事

あつた事とていふ事とていふ事

九月五日入人といふ事

可き事といふ事

九月五日入人といふ事

別當實行家安合は五月旬のふとら

云々れぬさ月さねりき手衣じりきまうめさき

原中他言雅定の家より五月旬のふとら

とらぬ

さみりたてまおねねにきうも腕の毛糸くのみ

回心をぬ

五月旬の朝乃志のほくとすほじ物事日ぬ

五月旬のふとら

さみりたて何うの柳みるた地へ玉り威はる成
少地より回さるまきあみいさめくく威ぬさきぬ

堀河院古時申言古方を同五月の節云

とらぬ

成りまきかみきり時さ月さるさき

大貳長實入日何を五月盡日行きた

由心やとらぬ

時言二し心と助かん入あじりさきや

たけいさぬ

助ぬささきやかきんたき足跡とさ月入はこ

可き事申しとらぬ

さきもみさけよのちまきかきりさきや

山家曉管とてく

山里の深く入管といふてく

あけ屋のほろあくとく

不方とてあれ

とてあけ屋のほろあくとく

可き言中よとてあれ

あけ屋のほろあくとく

あけ屋のほろあくとく

あけ屋のほろあくとく

六月

夏夜短

夏夜短

夏夜短

夏夜短

夏夜短

夏夜短

夏夜短

夏夜短

夏夜短

夏夜短

夏乃夜を御さるに...
 長言大久之實乃許と射水...
 宇治乃中け殿...
 別當寅村の家...
 殿下...
 夏中...

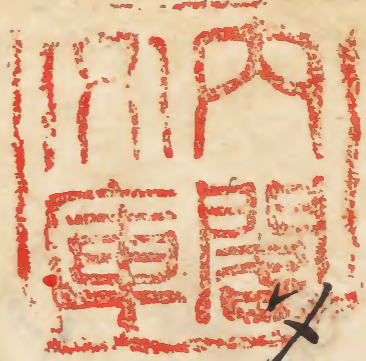
堀河院...
 雲居寺...
 入...

庭まはるくこぞも秋

と胡も又いさみよゆんさゆりなむさうさうさうさう

暁風如秋

夕々しき玉もく高きう風も家くる秋の思ふは成
ま言ちた久く之更に地乃前汝交うて言
ちしけり竹風如秋と云事と云



秋まね竹乃地のみすのむを志のよかまを
避暑や云事と云

みいさうあちも志こくさう風さかぬ世の井の里
東京大久保忠八条家より果為友友

と云云云云

きいの市うらまのほれ涼きうさくいさゆん地を

果邊細涼と云云云

秋と云のこ陰る井はゆみかきさくさくさく

六月をる世乃そかた云云云

と云云

世中れあひるすさびあせは黄ゆら果はよき

水邊細涼や云云云

かくよ涼きと云云云

果と云云

石井はびりり水音をきくはるる夏も関口は
可ぞ云乃申は泉とよまれ

さし井は木の下陰にわれ衣つさし一軒は
氷室とよまれ

さつさのみこと乃十年ききねはよ水室よまの
月とよまれ

ささの石と紙氷室は妙しなつとくみ持まこれ
夏乃日とあはれなつとゆいしはねあのみつゆり

里石を指大久保村の八條家牙令

野風と

^千志平見くま野崎うたはさしゆらなはてさ風の子は日

樹陰風来

日さるるあそびゆん誰かよの萩原風は待

輝とよまれ

石のゆ籠乃まみよはうとく木とて輝の影き

せみ乃ととみとよまれ

うほせさ乃とととみゆ成いんは世に跡き

人さ南へきり云みらるる輝とよま

とみかへかきとと姿あはれりる中輝の影

二条開田^殿雨塔於草中

けしきも夕立志はるあまはすも雨乃とてしぬ君乃高

の長備借伴通家より雲隔遠望や

事と云

新

也然らば夕立すくくしぬあまはすも雨乃高

可き新乃中より金つ火と云

世中をあらくすくあまはすも雨乃高

在東大久経忠乃家より金つ火と

事と云

心はるくすくしぬあまはすも雨乃高

日にと云

く風乃火乃煙はるくあまはすも雨乃高

く風乃人あまはすも雨乃高

事と云

葉乃店よりく水鶴はあまはすも雨乃高

く竹田乃よりく水鶴はあまはすも雨乃高

ゆ理た久野雪乃山桑家より晴水鶴

事と云

後よりあまはすも雨乃高

あまはすも雨乃高

あまはすも雨乃高

万云アラタキノストカ竹カキアネヨリモイモ

六日 秋の節は廿九日 持政殿より

いづれはかりいづれはかり

みま月乃照日乃新いづれはかり

いづれはかりいづれはかり

志きりいづれはかり

いづれはかりいづれはかり

夏草いづれはかり

いづれはかりいづれはかり

鴨河いづれはかり

いづれはかりいづれはかり

いづれはかりいづれはかり

いづれはかりいづれはかり

別苗家川の所今鴨川いづれはかり

いづれはかりいづれはかり

水風いづれはかり

いづれはかりいづれはかり

松中いづれはかり

いづれはかりいづれはかり

蓮花とよめる

玉ねとよめる乃にうまはしりてあはれむらたの光あ
可や新中よとよめる

る少しとよめる乃にうまはしりてあはれむらたの光あ
夏風とよめる

玉うに末こと風よとよめる乃にうまはしりてあはれむらたの光あ
こけとよめる

秋をよめる乃にうまはしりてあはれむらたの光あ
野望とよめる

むゆのあはれとよめる乃にうまはしりてあはれむらたの光あ

み月とよめる

あはれとよめる乃にうまはしりてあはれむらたの光あ
可や新中よとよめる
あはれとよめる乃にうまはしりてあはれむらたの光あ

あはれとよめる

教本并新集第三

秋部

七月

可ぞ平乃中ノ秋ハ日ノ光

子と世ナラ後あまの事ハもしく朝ナラ世ノ秋

夕風ヤシクハ線も光

秋きたる志のいあしと思ふ風もくまら言ふ

晚風告秋

夕風きたる恋ま風よと後ハ秋のく物ノ秋

はらりあひさやしく

秋きたる風はわらふ言をみあしやういひし

秋ハ心しく老あぬ風はわら物ハ

くははしハ光ハ

秋風ハ後ハ心ははらあしやういひし

可ぞ平乃中ノ秋ハ日ノ光

秋乃葉とちの枕よしとにハ風ハ

風底秋光としく

おき乃葉の朝乃あしやういひし

逐夜風涼

朝乃秋乃うハ風ハあしやういひし

人乃... 七月七日

い... 見... 七月

修理... 七月

...

七夕... 神...

又中... 七月

七夕...

...

七月七日... 七月

...

一... 七月

...

鳥... 七月

...

七夕... 七月

...

織女恨暎

七夕... 七月

...

七夕... 七月

織女期

七夕のあめのついでに重なるるやうなるを

八月のあつとくはうらやま

あいにんちをえとけむのふれや七夕はあつとく

八月

八月のあつとくはうらやま

あつとくはうらやまはうらやまのたのむく世のいそ

あつとくはうらやま

あつとくはうらやまはうらやまのたのむく世のいそ

あつとくはうらやま

あつとくはうらやまはうらやまのたのむく世のいそ

あつとくはうらやま

あつとくはうらやまはうらやまのたのむく世のいそ

あつとくはうらやま

あつとくはうらやま

あつとくはうらやま

あつとくはうらやまはうらやまのたのむく世のいそ

あつとくはうらやま

あつとくはうらやまはうらやまのたのむく世のいそ

あつとくはうらやま

かきつるうけをたにけの秋風よとわとて侍まはせ
女郎たねよとて

みづけの如くはのその女郎をくくかて侍まはせ
寄隔女郎也

よみまう打たれまう寄まわつて神を道中
向中女郎也

いづれをまわつてくくかて侍まはせ
女郎也よとて

よみまうあぬ河の中神をわたりて侍まはせ
下京久経忠八条家の女郎たねよとて

志をたてしよみまわつて侍まはせ
丹波前司重房乃家たねの女郎たねよとて

笑うしう萩たねのくくせ女郎をたてのすすけまはせ
尊た隠也

秋萩とくく水の上はたて侍まはせ
申細言後忠乃たねたて侍まはせ

秋にたて侍まはせ
田原玄乃府令一人たね

秋情寄萩

秋に人よりかきとるにほみあらしき
可き中よ秋とらぬ

あはれに秋葉のまはりにけり
暮後乃志乃垢河乃家と人
可き中よ

あつた露深や
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

殿下より野風や
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

秋露靡風

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を
あつた秋乃末に秋を

しめて落つがよもねはる女郎毛とてとらふ
とのうとまふとらぬ

かまはじまはく神もふしきまはりしをきわてた
可くまは中よしとまふとらぬ

たよままののまよとらぬとらぬ
殿下より三條は秋夜女もあつた

いふるは落つ風はかひとらぬ
まねたもつししやなたき風はまふし
観音寺より中よたやとらぬ
とらぬ

梅子のうあとやうかて木があ枝のほろわあとらぬ
とらぬ

蘭ととらぬ
はよあとらぬとらぬとらぬとらぬ

田舎にアの中は蘭ととらぬ
たあしけは舞しとらぬとらぬとらぬ

まふとらぬとらぬ
まふとらぬとらぬとらぬとらぬ

まふとらぬとらぬとらぬとらぬ
まふとらぬとらぬとらぬとらぬ

可くまは中よしとまふとらぬ

秋の夜半の静けさ
虫の音も静か
静かなる夜半の静けさ
虫の音も静か

虫為秋友

秋の夜半の静けさ
虫の音も静か
静かなる夜半の静けさ
虫の音も静か

秋の夜半の静けさ
虫の音も静か
静かなる夜半の静けさ
虫の音も静か

秋

田雅

田雅
初鷹の音
初鷹の音
初鷹の音

接尾の音

接尾の音
接尾の音
接尾の音
接尾の音

田上

田上
田上
田上
田上

杖乃田乃知も房のみゆ成誰大元よりき地

和歌草乃嘆よりうう風乃吹る

いづる里阿下はうを杖田のそりま程の客草

殿下より庭を露としく事とちれ

庭のせよとていさしう月草のたよる杖のゆ

百そ二の中はあまうそとちれ

あまうそ乃た乃をそとみはうり常と約しきん比

和歌草葉珠やうし

草乃葉うそり意やうゆまをい何き一露よとあ

田上より里よりくうの木は露のたに

和歌よと志うり葉の枝み進ちこまをけし力けり

やとらうら露よこもと志うりけしけ

うを風乃吹やうと志と園てちれ

葉乃露けは意のたこいれまきたらん物露

風乃けしき屋乃けくちう成園

和歌乃元とこしと路よと志をわすはくたわ

田上より田乃うり麻と路と

うとゆき

は葉ゆけし田乃ひのたきと志をわす

露乃り麻のうけう一葉は

ひまふね

羽元あけ花いろ麻乃新國ハ跡はこいよまふね

麻乃新とさきく後室、ら歌

ひまふねはいろ麻乃新まげ我志らわいろまふ

あまのまきとく^和靴いろ

我志ら、尺わいろまの志はこいよまふ

又田より麻ハ鳴をせめて

秋の田はあけあま志とまき鳴麻ハまひらま

田より中ハ麻とら終は

秋のまきまひらこいに鳴麻ハ田はまも歌と

田より一ふて麻の歌ハはらひらまきあは

妻あつ麻乃とこいよりまらむ田はまらまの歌

秋深岡麻

木葉はらまの麻ハまらむ海ハ麻のこ

後宿麻

ま枝この心かこくまらまの麻のこまきま

庭下まらわあいろまら

今^日あまのまの枝とまらまの麻のま

あま亭岡麻

あまのまのまの枝とまらまの麻のま

麻をくらむ

其の原もすも無きも一はくもなきもなきも

殿下より麻をくらむの又よくらむも

はあまよもあは

あまよもあまよもあまよもあまよもあまよも

麻をくらむはあまよもあまよもあまよも

三つに麻の原もあまよもあまよもあまよも

四つ葉の原もあまよもあまよも

けしあまよもあまよもあまよもあまよもあまよも

麻をくらむ

漢文拾

あまよもあまよもあまよもあまよもあまよも

殿下より原上麻をくらむ

秋に志す原もあまよもあまよもあまよも

障子従下もあまよもあまよもあまよも

あまよもあまよも

あまよもあまよもあまよもあまよもあまよも

河内守徑國もあまよもあまよもあまよも

少神も郷殿もあまよもあまよもあまよも

天河もあまよもあまよもあまよもあまよも

あまよもあまよもあまよもあまよもあまよも

松平の御殿に御座りて
その御殿に御座りて

千鳥の御殿に御座りて
その御殿に御座りて

朝日さまの御殿に御座りて
その御殿に御座りて

右の御殿に御座りて
その御殿に御座りて

馬場河原の御殿に御座りて
その御殿に御座りて

志の御殿に御座りて

その御殿に御座りて

日守の御殿に御座りて

都の御殿に御座りて

その御殿に御座りて

四條の御殿に御座りて

其の御殿に御座りて

殿下の御殿に御座りて

その御殿に御座りて

侍の御殿に御座りて

道とつらあはさきと接人^{つら}はさきとつらあはさきと

可き中はつらあはさきと

つらあはさきの質の芳に似たりやもつらあはさきのつらあはさきの
望月乃つらあはさきと

望月のつらあはさきの毛つきとつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

望月のつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

望月のつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

河津のつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

可き中はつらあはさきと

松風乃つらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

持衣乃つらあはさき

秋風乃つらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

持衣警眠

衣乃つらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

田家秋興

田乃つらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

月乃つらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

望月のつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

望月のつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

田乃つらあはさきのつらあはさきのつらあはさきのつらあはさきの

うに方より田をなすにせむ
秋乃田より多敷

し里をいつてこのは草をいとは風をいひきたる神を
稲乃とせられはるゝかん

ねほりより神のてはしきるをいふにせむ
母より多敷あそいりり神のいふに
夕月夜より多敷

くもりた夕月夜より多敷
白河より水上月やいりり多敷
志原よりみやら月夜より多敷

四條実麻合

^{新儀} 志原よりみやら月夜より多敷

鎌月

木の葉はる秋やうたは照月も多敷と新儀

田家待月

くもりた夕月夜より多敷
大貳長實八條家より水上月やいり
事より多敷

あしもあはれ秋の玉河秋はて色はる月夜
白河より多敷

八月十五夜遍照寺より觀月と云ふ

しる

文意地々月意夜出流の月をわしと後たき

殿下もく八月十五夜の内と云ふ

しきりくこま地いしゆ望月のみすたの金也

明石よまろく月とあふり夜浪

おろくもくもふ

秋及夜も月意ありの海風と風のたき

水上月

木から竹へ渡り行くさののみき

觀明月やとふまといふ

河岩てはゆわあふんまといふ

高陽院及吾念といふ

しるま衣とおきとて獨る月のすみの

月の河の中を夜化はる

しる

あふり命の及てはるしる

床安言りまじり物

秋の年と月とやとるしる

續

秋萩は下巻の月乃也とて、めでたき家の秋を

殿下より月秋友のいふは

思ふはるる色はしむ成物といふは秋の萩の月

津の園は志不ゆあみうらるる月スル

とふとみ

あはれ乃何^れ秋も月と後入席は

下鶴はあはれ秋も秋まはるる月

アはれ秋同防内侍のいふは

志不ゆあみうらるる月

とふとみ

あはれ乃何秋も月と後入席は

下鶴はあはれ秋も秋まはるる月

アはれ秋同防内侍のいふは

志不ゆあみうらるる月

あはれ乃何秋も月と後入席は

下鶴はあはれ秋も秋まはるる月

アはれ秋同防内侍のいふは

志不ゆあみうらるる月

あはれ乃何秋も月と後入席は

下鶴はあはれ秋も秋まはるる月

きりぎりすを又ていふ

月影を物思ふやあはれなるはゆきゆきと

人乃奇合せんとしていふは

紀乃固く吹上るときは思月をさうくまぬのねま

同九月よりいふは八月十九夜まき

と實スといふは

秋ももえぬと秋の月の名を

也

ほのぼのとつよは葉を物とて人のこころ

九月

九月十三夜於前武衛泉亭 詠閑見月

制隔一紙意和弄 并小序

細乃言はるる月のうらみけりいづききき言

ははもわきま寸みあまにきくは泉の氷とき

くきく言 思意がとみさういふは

にききしとみさういふは

くね人のいふ言ふねるは

秋の風よみみらるる秋のたを

乃世の言とて

秋の霧神とわ

きまらるはこころの事乃上人と申すは
此のうへにせしめし御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり

いふはありてはこころの事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり
御願の事なり御願の事なり

九月十三夜大井河はまきり舟のりて
清龍河入りてふくのちりてはし頭弁
乃正年にはねあき月とりあそびや
之舟と人ともくろまあはれ
紅葉は清龍河は母出てふかき月と
大貳長海員の家へ許合せんや志はく

しらぬ 未遂

許又心のえきせきくはえはあ夜の月とみ
殿下よりかききりて終るるはゆめ
地こむ月とくろまはあはれ

千
照月乃揺れあはれはあはれはあはれ
百首許中はきりてあはれ
じくすめあききりてあはれはあはれ

月前後雑事

徳後撰雑中

まきりてあはれはあはれはあはれ
歌仲のえは八條の家へ人十そき
しらぬあはれはあはれはあはれ

千神のりて海見の清きりてあはれはあはれ
しらぬ

又人ともくろまあはれ

しらぬあはれはあはれはあはれはあはれ
しらぬ

明月如畫

今年九月のいづれか月夜に...

ありて月をみくれば

何事とわかれし頃と海風は獨り乃月を

漢霽明月

晴好遊は秋の月夜に...

神祇御座仲乃許よ九月十三日

云ふふり

今此の月夜に...

殿上様...

思月よふを...

月前落葉

嵐を葉とて...

別當之...

朝とて...

一雲居...

と秋の...

殿下...

れ月...

月...

東三條^{あり}地乃みり上より秋意いさるる
けり喜のまじり世にほろほろまじり

思月入郵もあはれよにおあら今昔の家々も物
百々行中よ月よあはれ

^千本枯乃意少にこゝ高根くこゝき月のこゝの
^後棟理乃久野季のこゝ条家ら九月十
三日やしる事よあはれ

^金村言乃月乃まじりあはれいせいせいせいせい
たはれ許合し人よあはれ

くはれこゝ二はれしはれまじりあはれあはれ月
あはれ

月朧感懐

いよはら暗ぬあはれあはれあはれあはれあはれ

月あはれあはれ夜旅中よあはれあはれ

物よけりあはれあはれあはれあはれあはれ

中よ大文字入乃新みまはれあはれあはれあはれ

也

表いさる月あはれあはれあはれあはれあはれ

月朧感懐

月けりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

田よあはれあはれ九月十三夜はあはれあはれ

定晴々面白うららるる麻の魚之氣
なりは是はあはれ

いふまじの月と妻あや麻の魚之氣
殿下と練し月やうららるる

とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣
田より月とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣

後
雜
とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣
月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣

月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣
かゝるはあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣

いふまじの月と妻あや麻の魚之氣
月のいんしんしん

月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣
月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣

月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣
九月十二之夜は桂香開日殿下とあはれ

月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣
月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣

月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣
月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣

月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣
月乃とあはれと程の月と妻あや麻の魚之氣

田上より河を渡りてゆく柳の木は
秋のしきやりの物と書けり月夜はこゝろ
く尺をひきおこす

河柳より意おほぬと成地りて思つ月夜は

長月乃とていふ事なり月夜の晴るは

かすめり尺をひきおこす

立の初めは乃月とて人志建はれり地とのさみ

九月九日菊志をふりて人の心

はらり

ちりこり志をひきおこすはるは菊の志

菊帯霜

菊帯はらり秋意をひきおこす

田上より河を渡りて九月九日

こゝろのしきやりの物と書けり

竹乃葉より菊とていふ事なり

菊乃とていふ事なり

こゝろ

菊乃とていふ事なり

秋のしきやりの物と書けり

白秋とていふ事なり

行^くま^るく^し吹^く秋^意う^はら^りつ^く菊^のえ^を尺^段片^に
百^そ千^中の^菊の^えを^尺段^片

忌^まん^た書^くま^るく^し吹^く秋^意う^はら^りつ^く菊^のえ^を尺^段片^に
菊^のえ^を尺^段片^に

や^いろ^う菊^の下^の時^日菊^のえ^を尺^段片^に
秋^意う^はら^りつ^く菊^のえ^を尺^段片^に

く^はら^りつ^く菊^のえ^を尺^段片^に
残^菊菊^のえ^を尺^段片^に

初^菊菊^のえ^を尺^段片^に
菊^のえ^を尺^段片^に

伏^見菊^のえ^を尺^段片^に

下^の菊^のえ^を尺^段片^に
秋^意う^はら^りつ^く菊^のえ^を尺^段片^に

秋^意う^はら^りつ^く菊^のえ^を尺^段片^に
菊^のえ^を尺^段片^に

風^のえ^を尺^段片^に
菊^のえ^を尺^段片^に

い^ろう^菊菊^のえ^を尺^段片^に
菊^のえ^を尺^段片^に

た^く乃^も菊^のえ^を尺^段片^に
菊^のえ^を尺^段片^に

十月五日 紅葉

紅葉と見くらむはしよとて秋を朝とあはれむ

又人よとて秋を朝とあはれむ

雲とぬ海をたけき林とて秋とて紅葉

田よとてとたしきとて秋

と秋を深とてしき紅葉とて秋

原中細書雅定とて家の名合とて紅葉

とて秋

紅葉とてきたる人よとて秋を朝とあはれむ

田よと南村とて推しよとて秋

紅葉とて秋を朝とあはれむ

雅とてとて秋を朝とあはれむ

田よと南村とて推しよとて秋

秋田よとて秋を朝とあはれむ

子孫とて秋を朝とあはれむ

とて秋

秋田よとて秋を朝とあはれむ

殿下よとて秋を朝とあはれむ

紅葉とて秋

紅葉とて秋を朝とあはれむ

秋よとて秋を朝とあはれむ

十月廿九日秋の風きりくきり
はさくはさくはさくはさくはさく
はさくはさくはさくはさくはさく
はさくはさくはさくはさくはさく

誰れ松野と名の女部屯のまき
河津びりしは虫のいさくはさく
いさくはさくはさくはさくはさく

幸ふは虫きいさくはさくはさく
秋意はさくはさくはさくはさく
はさくはさくはさくはさくはさく

物よききいさくはさくはさくはさく
物よききいさくはさくはさくはさく

九月盡及今

草の葉よきいさくはさくはさくはさく
百りきり中よ九月盡

さきりし秋はさくはさくはさくはさく
さきりし秋はさくはさくはさくはさく

めぬも秋風さきりきりきりきり
めぬも秋風さきりきりきりきり

はさくはさくはさく

散木齋新集第四

冬

十月

百五廿申よ初冬入

いふも秋乃石秋と録ましと初冬なる時句

時句

木の葉乃びつらと心し時句ら涙意維ぬ物

田上乃びくさしはれはる意紅葉

りけり夕霜

志る道は夕霜にたのた衣をほけ

ふあて乃びつらと心し時句ら涙意維ぬ物

接木時句

少くも家こゝろき接の家

とらふら

いふも秋乃石秋と録ましと初冬なる時句

とらふら

時句ら涙意維ぬ物

時雨後紅葉

少くも家こゝろき接の家

殿下

たはくしんをくふまをさへんてふるまの
田よりけがひのりてあはるる
まのみ乃紅葉よんてふる

うしろのしをさきまのりてふるまの
たはくしん乃紅葉よんてふる

いささか後乃志くしをさきまのりてふるまの
むつ紅葉

ふれぬけのりてふるまのりてふるまの
田よりけがひ乃後重意のりてふる
むつ紅葉

紅葉せしむるまのりてふるまのりてふるまの

ふれぬけのりてふるまのりてふるまのりてふるまの

立田乃しん乃紅葉よんてふるまのりてふるまの

立田乃しん乃紅葉よんてふるまのりてふるまの

立田乃しん乃紅葉よんてふるまのりてふるまの

立田乃しん乃紅葉よんてふるまのりてふるまの

全秋

鳥羽のふらふらと吹く風の音に
うさぎの舞

あきくさしと風をよむうさぎの舞
大井河邊に水と落葉の音
うさぎの舞

風の中をうさぎの舞をよむうさぎの舞
小野の家と橋と落葉の音

吹く風をよむうさぎの舞
水上落葉

水とうさぎの舞と神の心
うさぎの舞
うさぎの舞

うさぎの舞
うさぎの舞

木枯るけと風をよむうさぎの舞
落葉随風

木枯るけと風をよむうさぎの舞
深し落葉

目撃するうさぎの舞
古京のうさぎの舞

うさぎの舞

おのり家のいさゝ紅葉あかばな誰よりよきよかそ
ら地ちよりあけ

くらみ一粒さしま成なりんど地ちの成なりれ
生田なまの森もりのままささおおりり

こまこの神かみ又またの意い志しのんなな生田なまの杜つ
終夜しゆうや同どう為な葉は

いさいのんああ女にんん乃のいいはは志しじじままのれ枯こここまま葉は
大升おほしげ何なに道みち運うんよよ人ひとよよここららええららぬぬ

おおののせせししののううららけけきき大升おほしげ何なに道みち運うんよよ人ひとよよここららええららぬぬ
神かみ正月しんげつ十日じゅうじつはは田のり上のりらら部のりのりちち

おおののらら乃のああららたたららうう部のりのりちち
地ちとと中ちゆうのの神かみああららぬぬ

鳥とりの部のり乃の人ひとの思おもひひああららのの色いろははららぬぬ
同どう鳥とり運うん懐くわい

ああままのの鳥とり乃の人ひとの思おもひひああららのの色いろははららぬぬ
いいちち田のり上のりららぬぬ

ううらら生なまららいいつつららけけつつ物ものののたたららぬぬ
田のり上のりのの鳥とり乃の人ひとの思おもひひああららのの色いろははららぬぬ

ももみみささららのの神かみああららぬぬ
神かみのの鳥とり乃の人ひとの思おもひひああららのの色いろははららぬぬ

一々其の事ありては

いふ事ありては

可き事ありては

ほむ事ありては

細代より

所領本にいふ事ありては

部乃人ゆりては

一々

之とせし人

所領殿田より

まうされし人

と

所領より

所領備細代

いふ事ありては

十一月

いふ事ありては

いふ事ありては

いふ事ありては

野行幸

し集乃みる里竟ゆーしーあろく比のさういふ書集

人二十そ弄ふらるる書物とある

そーしうわらふふささるる新みやまに我力竟さるる
又人ふらるる

尺の里らるる所萩原の事とて書きたるはあつた
た京大夫経忠乃八条家より書きたる

よあ歌

日よひのけりて意然成るるさうさうし
皇后宮亮顯因乃家より書きたる
よあ歌

夕やけのさるる書はさるるさうさうし
よあ歌

おあふとあふ

夕やけのさるる書はさるるさうさうし
よあ歌

白首弄及申さるる

日新さるる書はさるるさうさうし
よあ歌

野亭寒草

みららるる萩野のさるる書はさるるさうさうし
よあ歌

あけ井のさるる千さるる

たまひ風やけ井の書はさるるさうさうし
よあ歌
あけ井のさるる千さるる

千鳥とあはれ

難波よりあすの早朝に立千鳥しては、
恒く其後、はるばる千鳥とあはれ、
可く早中、千鳥と

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、
可く早中、千鳥と

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、

可く早中、千鳥と

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、

あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、
あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、
十二月

風雅

百三十一乃申しのたふ

いせんしは下好之たのたふたのたふた

う家風た

あしは維ねたしのたふたのたふた

雲散た

いさうあしはたふたのたふたのたふた

みはまはたふた

みまはたふたのたふたのたふた

大殿乃平たのたふた

いさうあしはたふたのたふたのたふた

水鳥た

いさうあしはたふたのたふたのたふた

月光映水た

いさうあしはたふたのたふたのたふた

殿下た

いさうあしはたふたのたふたのたふた

依月た

いさうあしはたふたのたふたのたふた

原た

いさうあしはたふたのたふたのたふた

月た

いさうあしはたふたのたふたのたふた

よひにふくむるはるるを結とく
あはれむるはるるを結とく

まことやはよひにふくむるはるるを結とく
あはれむるはるるを結とく

風雅雜

よひにふくむるはるるを結とく
あはれむるはるるを結とく

よひにふくむるはるるを結とく
あはれむるはるるを結とく

炭のふくむるはるるを結とく
あはれむるはるるを結とく

山家冬閑

跡継ぐまじきまの冬に
あはれむるはるるを結とく

白き雪の中は水鳥

志を運ぶるはるるを結とく
あはれむるはるるを結とく

木々の

よひにふくむるはるるを結とく
あはれむるはるるを結とく

水田水鳥

あはれむるはるるを結とく
あはれむるはるるを結とく

水田水

あはれむるはるるを結とく
あはれむるはるるを結とく

吉野地水也

平野地の上を流るる水也。其水不潔なるを言ふ也。
阿用河水と云ふ也。

あまの川則ち水也。其水清くして飲む可し。其水
也水と云ふ事也。

泉也。其水清くして飲む可し。其水
水と云ふ事也。

了。其水清くして飲む可し。其水
水清地と云ふ事也。

と初め申す事也。其水清くして飲む可し。其水

殿下と云ふ事也。

其水清くして飲む可し。其水清くして飲む可し。其水

先づ志保と云ふ事也。其水清くして飲む可し。其水

可くして飲む可し。其水清くして飲む可し。其水

高陽院殿の事也。其水清くして飲む可し。其水

智也。其水清くして飲む可し。其水清くして飲む可し。其水

加賀守家通國へ出立しる事候は
人老の事候は色なきしもの事候

冬にさら敷候の事候は色なきしもの事候
如神

長年意に違はれ物候は色なきしもの事候
大貳長實入家より今せん事候

殿下より書中遠慮と云ふ事候
聖如親高根と書候は色なきしもの事候

まじき候

頼伸の事候は色なきしもの事候
一色にせしめ候は色なきしもの事候

田と云ふ事候は色なきしもの事候
ふとみ候

某の事候は色なきしもの事候
この事候

と朝を志す。あはれに家より書はるる者たし。しるべきに
みよ。此の月とある

みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに
みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに

みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに
みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに

みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに
みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに

みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに
みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに

高年歳深

みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに
みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに

みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに
みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに

みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに
みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに

みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに
みよ。此の月とある。書はるる者たし。しるべきに

高年歳深

常少くすくはき風の向にさるるを
也

日

つる常けの文はかたむきさうりか
行路雷

常きみきねのみまはれおひら
心後雷

冬まきれ思しきまあはし雷ふり
雷埋寒茶

いづれ志とんまゆらゆるおひら
歳言述懐

物よしの心ゆれははれいかに
佛名と名

云母の師はみなおまはるははれ
歳中言

かき物よとけくきとくは内よ
日

あま雷まきさうるははれおひら
白雪中除却と名

あま雷のたはらふははれおひら
あま

しにきしんをさるる成りしるる物に力成
る

歳暮乃とととと

しにきしんをさるる成りしるる物に力成
る

しにきしんをさるる成りしるる物に力成
る

